

5 「後法興院記」に表れた丹波親康の事跡について

戸 出 一 郎

口中科の祖と言われる丹波親康の事跡をたずねて、親康と極めて親しい関係にあった近衛政家の日記「後法興院記」（以下「院記」）を披見して親康の医業の内容や貴族社会における生活状態などを調査した。

「院記」の著者近衛政家は文明十一年（一四七九）以後、関白・太政大臣・准三后に任叙され、永正三年（一五〇六）六二歳で他界した。後法興院は政家の法号である。

「院記」は寛正七年（一四六六）政家二一歳の時から永正二年（一五〇五）に至る四〇年間にわたる日記である。調査にあたっては「続史料大成」の中で公刊されたものを資料とした。

「院記」に親康の名前が最初に表れるのは応仁元年（一四六七）六月二五日で、応仁の乱の緒戦にあたり、親康の

宿所が細川勝元の軍勢によって焼き払われた事である。

同年七月六日、政家は戦乱を避けて宇治へ疎開したが、住居を失った親康は政家に連れられて宇治へ赴いた。

宇治では同年一月から、近衛家で毎月催されている和歌会が始められた。政家は和歌や連歌をこよなく愛し、歌人としても一流の人であった。注目すべきことに、親康にはその方面の才能があったようで、しばしば月次和歌会や連歌会に列席し、世話役や頭役、発句の担当など重要な役割を負わされている。これらの会には高位の貴族や最高の歌人、連歌師たちが参加している。

次に親康の医師としての事跡を見れば、医師として「院記」に表れるのは、全五〇回のうち一三回に過ぎない。その内容を列記すれば次のとおりである。

(一) 文明一六年、政家の風気・虫気に取脈並びに投薬。
 (二) 同年、禅閣の痢不通に頼秀と共に投薬。
 (三) 同年、小童の風気に投薬、五日後竹田周防に転医。
 (四) 長享二年、景陽軒の風気に投薬。
 (五) 同年、禅閣の三日熱の診察。一四日後、竹田周防に転医。
 (六) 同年、石蔵殿の痢不通、熱気に御脈。八日後竹田周防に転医。
 (七) 同年、

禪閣の痲病に二度往診。四日後、竹田周防に転医。(八) 明応二年、実相院准后の虫気に親康を召す。二日後死す。(九) 明応五年、瑞光院不例に親康派遣。(一〇) 明応九年、関白の息女二歳の風気に資直、清侍従と共に処方を出す。(一一) 文亀元年、政家の風気に清侍従、明重取脈、親康処方を進ず。

親康は政家から診療の機会を度々与えられているが、必ずしも主人の期待に応えたとは言いがたく、その治療はしばしば成功せず、竹田周防や他の民間医によって後始末がなされていたように見受けられる。前記の(三)(五)(六)(七)がその例で、いずれも後日後に竹田周防に転医している。

和氣・丹波の医師の中で、「院記」にその名が表れる回数は親康がとびぬけて多く、医療の記録も彼がもつとも多い。これを見れば親康が如何に政家から寵愛されていたかが察しられる。しかし親康は医師としては政家の期待に応えることができなかった。和氣・丹波の医師たちの中で真に信頼を得ていたのは半井顕重ただ一人であった。そしてこれら官医の実状を補ったのは竹田周防・法

印・宰相並びに清法眼・清侍従・上池院・眼科医芝田・糸法師らの民間医であった。なかでも政家が最も信頼していたのは竹田周防であったが、彼は明応六年に死亡した。

丹波親康は貴族社会の中に深く入り込み、近衛政家からは家族のように愛され、しばしば和歌や連歌の席に連なっているが、医師としての手腕は劣っており、業績は少なかったように思われる。

親康は兼康と共に口中科の祖として名高いが、「院記」に見る限り口中に関する病は一例もなく、彼が口中療治をした記録は全く見いだせなかった。

(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究室)